

絵画

雅楽や茶道など、日本の伝統的な芸術形態の多くと同様に、絵画も当初、中国文化の影響を強く受けていた。屏風、掛け軸、伝統的な住居の部屋を分割する襖は今日、単体で芸術作品とみなされている絵画で飾られていた。これらの絵画の素材（紙または絹）はどの場合も同じだったため、これらの装飾が別のものに移されることは珍しくなかった。襖絵の紙が切り取られて屏風に移されたり、巻物が傷んだりした場合には、ある部分だけ切り取られて壁に掛けられた。伝統的な和紙と墨は、適切に管理されていれば何世紀も持つため、作品は定期的に移動されたり、再利用されたりした。

何世紀もの間、絵画の主題は主に宗教的なテーマや情景から描かれていたが、室町時代（1336～1573）の終わり頃から、日常生活の場面を描写することが一般的になった。季節の移り変わりは日本美術では一般的な題材であり、屏風などの大きな作品の場合、時間の経過は右から左に向かって表現される。巻物のように、これらの芸術作品は視覚的に「読む」ことができるのである。

井伊家のコレクション

幕府と大名の家族は、彼らの地位の象徴として、唐物と呼ばれる立派な大陸からの輸入作品を収集し、展示するようになった。大名家にとってはこれらの作品の蒐集は公式な重要な任務でもあった。井伊家は主に幕府に好まれていた狩野派の画家を雇い、住居を飾るための作品を作らせた。